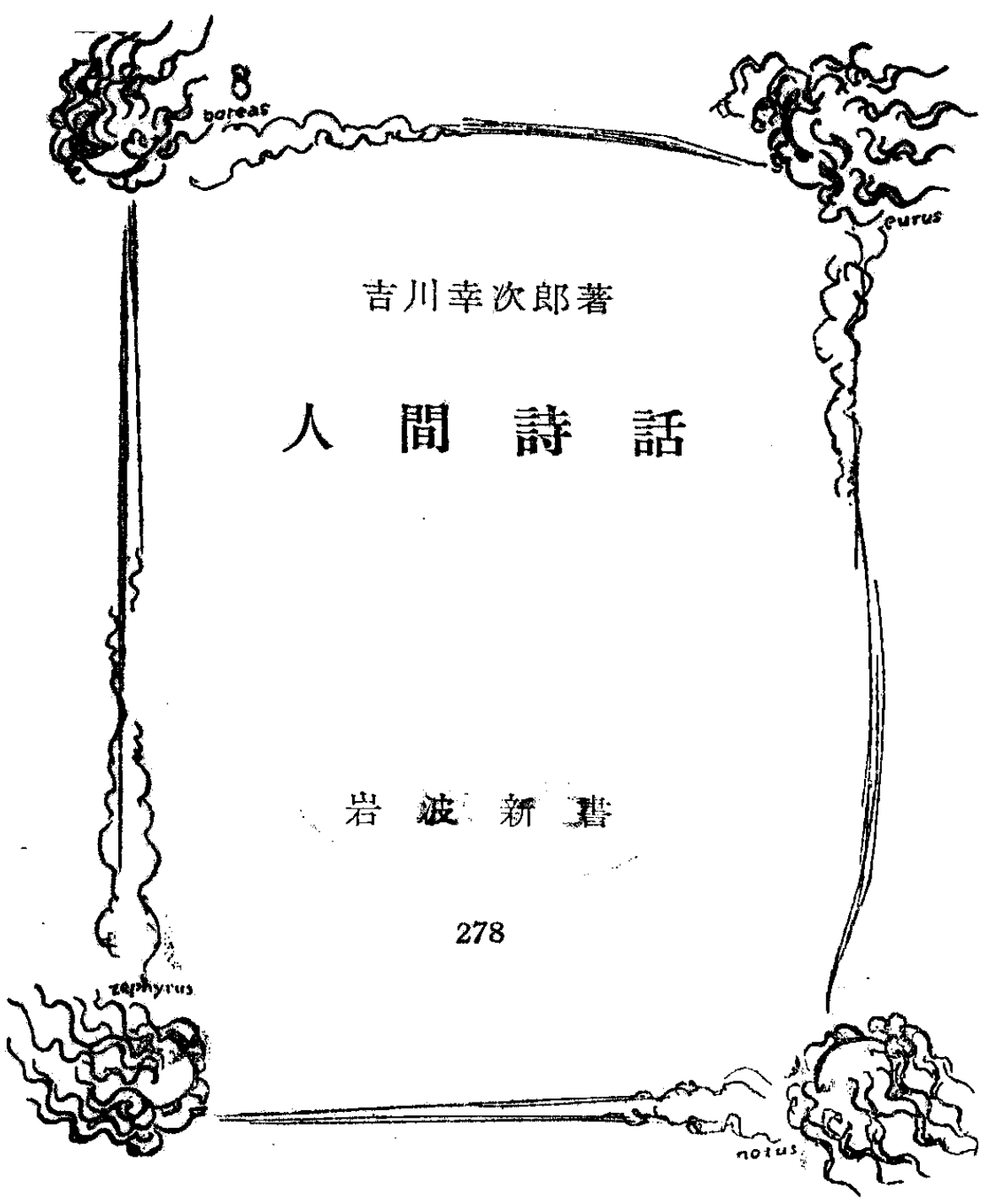


吉川幸次郎著

人 間 詩 話



岩 波 新 書



吉川幸次郎著

人間詩話

岩波新書

278

吉川幸次郎

1904年神戸に生まれる

1926年京都大学文学部卒業

専攻—中国文学

現在—京都大学教授

著書—「唐代文学抄」「杜甫私記」
「杜甫ノート」「元雜劇研究」
「新唐詩選」同「続篇」「漢の武帝」(以上三点岩波新書)など

人間詩話

岩波新書(青版) 278

昭和32年6月17日 第1刷発行

¥ 100.

昭和32年7月5日 第2刷発行



著者 よし かわ こう じ ろう
吉川幸次郎

東京都千代田区神田一ツ橋2-3
発行者 岩波雄二郎

東京都板橋区双葉町2
印刷者 白井知一

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩波書店
神田一ツ橋2-3

落丁本・乱丁本はお取替いたします

三陽社印刷・永井製本

目次

その一	白居易（七三—八四）	一
その二	白居易	五
その三	白居易	九
その四	韓 愈（七六—八四）	一四
その五	韓 愈	一七
その六	張 籍（七五？—八三〇？）	二一
その七	杜 牧（八〇三—八五二）	二六
その八	杜 牧	三〇
その九	樂府古辭	三四
その十	相逢行	三七
その十一	艷歌行	四三

その十二	挽歌……………	四八
その十三	古詩……………	五一
その十四	古詩……………	五四
その十五	悲歌……………	五九
その十六	古詩 古歌 古絶句……………	六三
その十七	古鏡銘……………	六七
その十八	饒歌……………	七〇
その十九	狩野直喜（一八六—一九四七）……………	七四
その二十	俞樾（一八三—一九〇六）……………	七八
その二十一	章炳麟（一八六—一九三六）……………	八二
その二十二	魯迅（一八八一—一九三六）……………	八五
その二十三	王国維（一八七—一九二七）……………	八八
その二十四	陶潜（三三—四三七）……………	九二
その二十五	陶潜……………	九六

その二十六	黄丕烈（一七六三—一八二五）	瞿中溶（一七六九—一八四二）	101
その二十七	内藤虎次郎（一八六六—一九三四）		105
その二十八	内藤虎次郎		108
その二十九	内藤虎次郎		111
その三十	倪海曙 杜甫（七二一—七七〇）		114
その三十一	陸游（一二三五—一二九〇）		118
その三十二	范成大（一二三五—一二九三）		121
その三十三	范成大		126
その三十四	杜牧（八〇三—八五三）		130
その三十五	杜牧		133
その三十六	李商隱（八三三—八五八）		135
その三十七	李商隱 李賀（七九一—八一七）		140
その三十八	狩野直喜 蘇軾（一〇三六—一一〇一）		145
その三十九	狩野直喜 蘇軾		149

その四十	狩野直喜 蘇軾	一五三
その四十一	錢秉鑑（一六二—一六三）	一五五
その四十二	鈴木虎雄（一八六—）	一六〇
その四十三	李 益	一六四
その四十四	程 曉	一六八
その四十五	傅 玄（二七—二七六）	一七三
その四十六	朱彝尊（一六九—一七九）	一七六
その四十七	朱彝尊	一八〇
その四十八	梅堯臣（一〇二—一〇六）	一八四
その四十九	梅堯臣	一八八
その五十	蘇 軾（一〇六—一〇一）	一九三

あとがき	一九七
------	-----

その一 白居易 (七三―八六)

白居易、すなわち白樂天の長詩は、往往にしてお説教が多い。またお説教でない長詩、たとえば「長恨歌」、「琵琶行」などは、すこし甘すぎるようにも思われる。しかしその小詩には、いつものお説教癖が、スペースの制限のために、かえって適度のモラルとなり、それが甘さとむすびついて、なかなかよいものがある。

春風搖蕩自東來

拆盡櫻桃綻盡梅

惟餘思婦愁眉結

無限春風吹不開

春風は揺れ蕩きつつ東より来たりて

桜桃を拆き尽くし梅を綻ばし尽くす

惟だ餘すはもの思ふ婦の愁いの眉の結ばれて

無限の春風に吹かるれども開かず

桜桃^{桜桃}というのは、二字でゆすらうめ。その桜桃と梅をすっかり開かせ切った春かぜも、ものおもう婦^{つま}、おそらくは棄てられた妻である、その眉だけは、ひらかせるすべがない。

2

斜凭繡床愁不動

斜^{しや}め^めに繡^{しやう}床^{しょう}に凭^より愁^しいて動^うかず

紅綃帶緩綠鬟低

紅^はき綃^はの帶^{おび}は緩^{ゆる}び緑^きの鬟^{たまげ}は低^たれたり

遼陽春盡無消息

遼^{りやう}陽^{やう}の春^{はる}は尽^つきたるに消^{しょう}息^きなく

夜合花前日又西

夜^や合^{ごう}花^はの前^のに日^ひは又^{また}西^しす

「閨婦^{けいふ}」と題して、出征兵士の妻を歌った。まじろぎもせずに、刺繡台によりかかっている。「帯が緩ぶ」というのは、愁いのために体がやせたのである。国境の遼陽^{りやうやう}でも春は終りであろうに、手紙は来ない。じっとものを思う視線の前にあるのは夜合^{やごう}の花、ねむの花のことだそうだが、その名は夫婦の飲会を思わせる花の前を、午後の日の光は、つれなく夕ぐれへと近づいてゆく。きのうとおなじように。

花の名がよく出てくるのは、中国の詩の常だが、モラルのもっとあらわなものもある。
「白き牡丹」^{びやくたん}と題して、

白花冷淡無人愛

亦占花名道牡丹

應似東宮白贄善

被人還喚作朝官

白き花は冷淡^{れいたん}にして愛する人も無きに

亦^{また}花の名を占めて牡丹^{たん}と道^いう

應^{まさ}に似たるべし東宮の白贄^{はくぎんぎん}善の

人の被^{なる}に還^{また}た喚^よばれて朝官^{きょうくわん}と作^いうに

白贄善とは、白楽天自身のこと。贄善は官名。東宮學問所の事務官であるこのおれが、やはり役人といわれること、けだし白い牡丹も牡丹のうちというわけか。

さて役人というものは、つまらない。ことにちかごろは、年をとった。

形羸自覺朝殫減

形^{かたち}は羸^やせて自^{みづか}らずから覺^{おぼ}ゆ朝殫^{きんげん}の減^へぜしを

睡少偏知夜漏長

實事漸消虛事在

銀魚金帶繞腰光

睡り少くして偏えに知る夜の漏の長きを

實事は漸く消せて虚事のみ在り

銀魚と金帯と腰を繞りて光る

銀魚金帶どちらも勲章、ふえたのは年功と共にふえる勲章のかず。實事、つまり内容はだんだんからっぽうになって、あるのはばかりしい虚事ばかり。人ごとではない。私などもろくな講義はできずにいて、会議ばかりがいそがしい。

宴遊寢食漸無味

杯酒管絃徒繞身

賓客歡娛童僕飽

始知官職爲他人

宴遊も寢食も漸く味わい無く

杯酒と管絃と徒らに身を繞る

賓客は歡娛し童僕は飽く

始めて知りぬ官職は他人の爲なるを

官仕えとは、要するに、取り巻きと下男に飯をくわせるためのもの、幸か不幸か、これは日本の大学の先生では、おぼつかない。

その二 白居易

人生四十未全衰

我爲愁多白髮垂

何故水邊雙白鷺

無愁頭上亦垂絲

人生 四十 未^いまだ全^{ぜん}くは衰^しえず

我は愁い多^なきが爲^{ため}に白^{はく}髮^{はつ}垂^たる

何故に水^{みづ}邊^べの双^{ふた}つの白^{はく}き鷺^{さぎ}

愁い無^なき頭^{かぶ}の上^{うへ}にも亦^{また}た糸^{いと}を垂^たる

白樂天^{はくらくてん}が、江州^{かうしゅう}、といえは今の九江^{きゅうきゅう}、そこで例の有名な「琵琶行」は作られるのであるが、その江州の副知事として赴任する舟旅の途中、どこかの水^{みづ}邊^べで作った七言^{しつげん}絶句^{てつこ}である。人生四十といえは、働きざかり、しらがのはえる年でもないのに、苦勞性の私には、しらがが

ある。それはそれで残念ながら、わけがわかるとして、わけがわからないのは、あそこにいる二匹の白さぎ、何のくったくもないくせに、やはり絹糸のような白い毛をたらしている。

当時、詩人は四十四歳、髪に白いものがまじりだしたことが、気がかりであった。何年か前、さいしょの一本を、鏡の中で見つけた時には、

白髪生一莖

朝來明鏡裏

勿言一莖少

滿頭從此始

白髪一莖を生ず

朝來明鏡の裏

言らふかれ一莖は少しと

頭に滿つること此れより始まらん

といい、そのうち櫛のさきに何本かからむようになって、細君が情なさそうな、また氣の毒そうな顔をした時には、おれもそろそろ、今まで読んだ本のつかれやら、のんだ酒のつかれの出る年、友達には死んだのもあれば、遠くへ行ったものもある、しらががはえても

不思議はないと、例のモラルでさとしている。

白髮知時節

暗與我有期

今朝日陽裏

梳落數莖絲

家人不慣見

惘默爲我悲

我云何足怪

此意爾不知

凡人年三十

外壯中已衰

但思寢食味

白髮は時節を知り

暗かに我と期ること有り

今朝日陽の裏に

数莖の糸を梳り落とせり

家の人は見るに慣れざれば

惘み黙して我が爲に悲しめり

我は云う　これ何ぞ怪しむに足らん

此の意を爾は知らざるのみ

凡そ人は年三十にして

外は壮んなるも中は已に衰う

但みに寢食の味を思え

已減二十時
況我今四十
本來形貌羸
書魔昏兩眼
酒病沈四肢
親愛日零落
在者仍別離
身心久如此
白髮生已遲
由來生老死
三病長相隨
除却念無生
人間無藥治

已に二十の時よりは減ぜり
況んや我は今や四十
本來形も貌も羸せたるを
書魔は兩眼を昏くし
酒の病れは四肢を沈くす
親愛のひとは日々に零落し
在る者も仍に別離す
身も心も久しく此の如しとせば
白髮の生ずるは已に遅し
由來生と老と死と
三つの病いは長に相に隨う
無生を念うを除きては
人間治すべき薬は無し

零落とは、おちふれることなくして、死ぬことであり、無生とは仏教の教えである。

その三 白居易

ところで江州の任地でも、白居易のしらははふえるばかりであった。「^{おちち}桜桃の花の下にて白髪を數ず」という詩にはいう、

逐處花皆好	逐 ^{いた} る處 花は皆な好 ^よ ろしきに
隨年貌自衰	年 ^{とし} に隨 ^{したが} せて 貌 ^{おほ} は目 ^め のずと衰 ^し う
紅櫻滿眼日	紅 ^{こう} 櫻 ^{おう} 眼 ^め に滿 ^み つる日
白髮半頭時	白 ^{しろ} 髮 ^げ 頭 ^{かぶ} に半 ^{はん} ばする時
倚樹無言久	樹 ^き に倚 ^よ りかかりつつ言 ^{ことば} 無 ^な きこと久 ^{ひさ} しく

攀條欲放遲

臨風兩堪歎

如雪復如絲

糸を攀りつつ放たんと欲ること遅し

風を臨にして両つながら歎ずるに堪えたり

雪の如く復た糸の如し

また、去年生まれたばかりの女の子を前にしては、おまえが娘になる頃には、おとうさんの頭は、まっしろだろう、と歌っている。

有女名羅子

生來纔兩春

我今年已長

日夜二毛新

顧念嬌啼面

思量老病身

女有り 名は羅子

生まれて来り纔かに兩つの春

我は今や年已に長け

日に夜に二たしろの毛の新しゆく

嬌り啼く面を顧りみ念いつつ

老い病みし身を思量す